とろ蜜満淫アパート

隣人は女子大生・OL未亡人

庵乃音人
挿絵／木静謙二

リアルドリーム文庫

試し読み版

Contents

目次

第一章　パンティの誘惑……4
第二章　未亡人の筆下ろし……41
第三章　美人ＯＬとＳＭプレイ……83
第四章　壁越しの情欲……129
第五章　ついに、憧れの女子大生と…166
第六章　幸せすぎる４Ｐハーレム……227
エピローグ　未来へ……279

登場人物 *Characters*

矢口 徹
(やぐち とおる)

祖母が経営するアパートの一階に期間限定で住まわせてもらうことになった十九歳の青年。その場の空気に流されがちだが、素直な一面もある。童貞に負い目を感じている。

白川 里穂
(しらかわ りほ)

徹の上の階に住む、お嬢様ばかりの大学に通う二十歳の女子大生。誰にでも分け隔てなく明るく接する。清楚で純情だが、スレンダーなモデル体型でGカップの巨乳を持つ。

牧野 綾子
(まきの あやこ)

徹の隣の部屋に住む、母性愛豊かな三十五歳の未亡人。柔和な人柄だが、叱るべき所は叱ってくれる母親的な女性。Hカップのむちむちした完熟の女体で大胆に迫る一面もある。

時村 由真
(ときむら ゆま)

里穂の隣の部屋に住む、生真面目だが、暗い印象も持たれる二十七歳のOL。クールな眼鏡美人の雰囲気とは裏腹に、好色でM っ気が強い。Fカップでモデルのような体型。

第二章　未亡人の筆下ろし

1

「たいしたものは作れなかったけど、さあ、遠慮なく召し上がれ」
気落ちする徹に、発破をかけようとする声にも聞こえた。綾子は色っぽい笑みを浮かべ、向かいの椅子に腰かける。
「す、すみません。うわあ、すごいご馳走……」
徹はずっと、恐縮しきりだった。
さっきまでカーネーションの一輪挿しが置かれていたテーブルに、たくさんの料理が並んでみれば、申し訳ないというその気持ちはいっそう強くなる。
牛肉とキャベツの辛味噌炒めに、具だくさんのかに玉。海老とシメジのチリソースに、茄子とベーコンのクリームスープ蒸し、その他、その他――。
しかもこれらのおいしそうなメニューは、すべてが綾子の手料理だ。
《よかったらご飯でも食べにいらっしゃい。精がつくわよ？》

徹を元気づけようとした未亡人は自ら彼を部屋に誘い、こんなご馳走を振る舞ってくれた。
気落ちしてしょんぼりしている徹のことを、どうやら見かねたらしかった。
どうしたのと問われた時には「ちょっといろいろありまして……」と言葉を濁した徹だったが、それから数日後、いきなり綾子に食事に誘われたのであった。
「うわあ、おいしいです。どれもこれも……」
腹ぺこで部屋を訪れた徹は、遠慮しないでと言われたのをいいことに、綾子の手作り料理に箸を伸ばした。
思わず口にする言葉は決して世辞などではなく、ほっぺたが落ちそうというのは、まさにこういうことを言うのだろうと、本気で思う。
「ありがとう。久しぶりに、がんばってみたのよ？　この頃、腕の振るい甲斐もなくなっていたから。ンフフ……」
キッチンのテーブルに向かいあった綾子は、ちょっぴり寂しげな笑みを浮かべ、自分も食事を続けながら言った。
「あの……立ち入ったこと、聞くようですけど……」
綾子の微笑みに甘酸っぱく胸を疼かせつつ、徹は聞く。

「あら、なぁに」
「だ、旦那さんは……何年前に……その……」
「ああ……もう、四年になるかしら。それ以来、ずっと一人。フフ……」
「寂しく、ないんですか？」
「寂しいわよ」
当たり前のこと聞かないでとおどけるように目を見開き、笑いながら綾子は言った。
「すみません……」
「好きだった人がいなくなるんだもの。それは寂しいに決まってる。この頃よ、ようやく精神的に立ち直れてきた気がするのは」
どこか遠い目をした綾子は、自分自身に「そうよね？」と問いかけてでもいるかのような調子で言った。
「そう、ですか……」
つまらないこと聞いちゃったかな、と少しばかり申し訳なく思いながら徹は何度もうなずいてみせる。
それにしてもうまいな、どれもこれもと本気で感激し、見る見る綾子の手料理を胃袋の中に流しこみながらだった。

戸外は今日も茹だるような暑さ。
強い日差しが注いでいたが、部屋にはほどよく空調が効いていた。
こんな素敵なランチは、正直後にも先にもない気がする。
六畳の和室に、徹の部屋のよりかなり広々としたキッチンがついた部屋だった。
作りは当然、同じように古いものの、女性らしいセンスでシックかつ上品に部屋の中が整えられ、初めて入ったというのに、何だかとても落ち着いた。
部屋の中いっぱいに立ちこめる、女の人の脂の匂いの艶めかしさには、正直ドキドキしたけれど。
「いつまでも過去に囚われていてはいけないのよね。徹ちゃんのおばあさまにここに置いてもらえて、いろいろと考えたりしている内に、やっとそんなことも思えるようになってきたの」
「そう、だったんですね……」
「うん。だから、徹ちゃんは幸せなのよ？」
「……え？」
いきなり話の矛先を向けられ、徹は思わず箸を止めた。きょとんとして未亡人を見れば、綾子は目を細め、色っぽい仕草でくすっと笑う。

「おばあちゃん、ですか？」
「じゃなくて……好きな人はちゃんと生きているんじゃない。しかも、毎日こんな近くで顔を合わせられて」
「は……⁉」
徹は絶句した。
意味深長な視線で見つめられ、たちまち顔が熱くなっていく。
「里穂ちゃんのことでしょ、悩んでいたのは？」
なおも柔和に微笑みながら、綾子はズバリと言った。徹はもう、しどろもどろだ。
「ど、どど、あの、あの、どど、どうして――」
「里穂ちゃんを問いつめたの。絶対に話せませんって言ったけど、そこはほら、亀の甲より何とやらって言うじゃない？　尋問して吐かせちゃった。ウフフ……」
「え……ええっ⁉」
思いもよらないことを聞き、徹は愕然となった。
彼が元気のない理由などまったく分からないながらも、元気づけようと食事に誘ってくれたのだとばかり思いこんでいたのである。
しかし、そうなると分からないことがあった。

「あの……⁉　どうして……り、里穂さんが原因だって……？」
「あら。そんなの簡単よ」と綾子は吹き出す。
「だって徹ちゃんの顔に、ずっと前から書いてあったんだもの。『俺は里穂さんが大好きですって』」
「え……ええ⁉」
悪戯っぽく微笑まれ、二の句が継げなかった。
自分はそんなにも分かりやすい顔をして、これまでずっとここで暮らしていたのか。穴があったら入りたいとは、まさにこのことである。
「元気出しなさい、徹ちゃん。男の子なんだし、好きな女の子のそんなものが舞いこんできたら、そりゃおかしくもなるわよ」
「うう……で、でも……」
あの恥ずかしい行為の一部始終がこの未亡人にもばれていたかと思うと、いたたまれない心地になった。
あれ以来、徹と親しげに交流しようとしてくれていた里穂もぎこちない態度で彼を避けるようになってしまっている。
パンティの弁償のつもりで渡そうとしたお金も、受け取ってはもらえなかった。

「ねえ、徹ちゃん。好きだったら堂々と告白しちゃったら？」
うなだれる徹に苦笑し、彼の背中を押すように綾子は言う。
「……えっ」
「人生は一度きりよ？　月並みな言い方だけど、生きている今を精いっぱいがんばって、大事に思う人には積極的にならないでどうするつもり？」
「綾子さん。でも、俺なんて……」
優しい檄にジーンと来るものはありながらも、徹はやはりいじけた。
容姿も学力も、しつこいようだがコンプレックスだらけ。しかも……しかも――。
「もしかして……まだ童貞くん？」
徹の苦悶の原因に察しがついたかのように、囁く声で綾子は聞いた。
「――ええっ!?」
「……」
「……は、はい。実は……」
「ウフフ。やっぱり」
素直に告白すると、綾子はハッとするほど色っぽい笑みで、徹を見た。
「女の人を知らないと、あんな可愛い子は、ちょっと眩しすぎちゃう？」

「あ、綾子さん……」
何から何まで見透かされている、そんな気分になる。上目遣いの悪戯っぽい微笑で見つめられ、徹はこくりとうなずいた。
「高嶺の花もいいところで、まともに会話もできません。ヒリヒリと感じること、いっぱいありすぎて……」
「そんなに大袈裟に考えること、ちっともないのに」
徹の正直な吐露を聞き、ちょっぴり呆れたように笑いながら、綾子は言う。
「当たって砕けろって言うじゃない。何もしない内から物事を決めつけちゃうのは、もったいないわよ」
「何もしてないどころか、もはや超マイナスからの関係です……」
「そんな風に思わないの」
いじける徹に、優しい口調で説き伏せるように綾子は言った。
「劣等感なんて、正直自分が思っているほどには、周囲は考えてもいないものよ?」
「でも——」
「やっぱり敷居が高すぎるんです、里穂さんは、って?」
「う……」

その通りだった。徹は何も反駁できず、またもうなだれる。
長いこと、二人はそうして、テーブルを挟んだまま無言で対した。
「……ふう。しかたないわね」
やがて、何かを決意したようなため息とともに未亡人が言った。
徹は思わず、綾子を見る。
「……女の人を知らないことが劣等感だというのなら、私が教えてあげる」
「……は⁉」
聞き違えたのかと思った。徹はどぎまぎと綾子を見つめる。
「あ、あの……綾子さん？　あ……」
美熟女は席を立ち、テーブルを回って彼の前へと近づいた。潤んだ瞳で青年を見つめ、キッチンの床に膝立ちになる。
（えっ……ええっ⁉）
「劣等感なんて感じてはだめ。男の子でしょ……？　徹ちゃんぐらいの年ごろだと、感じなくてもいい劣等感に囚われてしまうものなの」
「うわっ、ええっ……？」
綾子は徹を、椅子の上で自分に向き直らせた。

諭すような、励ますような色っぽい声で言い、照れ臭そうに微笑んだかと思うや、いきなり細い白魚の指を、徹の股間に近づける。
「あああ、ちょ……綾子さん……」
ジーンズの上から陰茎を掴まれた。ソフトなタッチでやわやわと揉みしだかれる。
「うわあ……」
「今日だけ、特別よ？　私が、いろんなこと教えてあげる。それで、元気出しなさい。いい？」
「あ、あの⁉　ああ、そんな。わあ……」

2

驚きのあまり、まともに言葉も出てこない。
上目遣いのまなざしで、色っぽく微笑みながらだった。綾子はやわやわとペニスをまさぐり、青年の情欲をしつこい責めで刺激する。
（嘘だろう）
白い指が波打つ動きで、肉棒を揉んではそっと放した。そんな行為を繰り返され、

意志とは関係なく、ムクムクと男根が勃起し始める。
「ま、待って、綾子さん。こんなことしちゃ、だめだよぅ……」
「どうして？　知りたくないの、男と女のこと……徹ちゃんを、もっともっと素敵な男の子に成長させてくれるかも知れない、大人の男と女だけのこと……」
「大人の、男と……女……あああ……」
ねっとりと、淫心の琴線を舐めしゃぶるかのような声音で囁かれた。
徹は天を仰ぎ、苦悶なのか快感なのか、自分でもすぐには判断できない不様な声をあげる。
不意打ち同然に始まった、突然の愛撫。それなのに、気づけばペニスは硬さを増し、早くもデニムの股間部を、三角テントに盛りあげる。
（なんてこった）
「ンフフ、やっぱり若いわね。もうこんなに……」
戸惑う本人とは裏腹に、身も蓋もなく反り返りだした牡の一物に、綾子は潤んだ瞳を艶めかしく細めた。微笑む朱唇の端を、色っぽく吊り上げる。
両手が徹のジーンズに伸びた。
ボタンをはずし、本人の承諾も得ないまま、股間のファスナーを下ろしていく。

「綾子さん⁉」
「恥ずかしがらないの。こんなにおちんちん、おっきくさせておいて、そんな風に恥ずかしがっても説得力ないわよ。ほら、お尻あげて」
「で、でも」
「あげなさい、ほら」
色っぽい声で重ねて催促され、徹はとても拒みきれない。
いきなり始まってしまったとんでもない展開になおも戸惑いながらも、綾子に乞われるがまま、そっと椅子から尻を浮かせた。
「フフ、そう、いい子よ……」
綾子は母親のように優しく囁くと、下着のボクサーパンツごと、青年の下半身から、一気にズルリとジーンズを脱がす。すると、
――ブルルルンッ！
「まぁ……」
「ううっ、は、恥ずかしい……」
脱げようとする下着に引っかかり、一度は下向きになったペニスが、その反動も露わに、雄々しくしなりながら勃起の全容を晒した。

上へ下へと鹿威しさながらに雄々しく震える。肥大した亀頭の暗紫色を、眼前の熟女に見せつけるようにした。

「すごいじゃない、徹ちゃん。知らなかったわ。おちんちん、こんなに……」

地味で大人しい純朴な学生が、まさかこれほどの肉杵を秘め隠しているなどとは、夢にも思わなかったのか。

綾子は演技ではなく、本当に驚いたような顔つきになり、天に向かって亀拳を突き上げる徹の怒張に目を見張った。

「はうう、み、見ないでよ、恥ずかしい……」

謙遜でも何でもなかった。

こんな風に、あられもなく勃起してしまった肉棒を自分以外の誰かに見られるなんて、正真正銘初めてのこと。

たしかに里穂にも恥ずかしいシーンは晒してしまったが、あの時はまだ、ペニスはパンティの中にあった。

それがいいことだったのか、最悪のことだったのかは別問題だが。

「は、恥ずかしがることないわ、徹ちゃん」

股間を隠そうとする徹の両手をかぶりを振りながら払いのけ、綾子は嘆声を零して

肉棒を握った。
「わああ、あ、綾子さん……」
「自信持ちなさい、徹ちゃん。こんな逞しいおちんちん持っている男の人、そうはいないわよ。んっ……」
「うわあ。うわああ……」
……しこしこしこ。しこしこしこしこ。
徹の両足を開かせ、居場所を確保した未亡人は、さもそれが当然の行為ででもあるかのように、いよいよ彼の屹立を、上へ下へとしごき始めた。
白く細い指が、徹のピンクの肉幹に、朝顔の蔓のように巻きつく。
綾子の指は、肌の部分はひんやりとしているのに、内部は淫靡な火照りを帯び、すべすべした感触と得も言われぬ温みで、徹の極太を喜悦させる。
「あ、ああ、綾子さん……」
「知ってるでしょ？　大人の男は女の人に、こういうことをしてもらうの。愛しあった男と女は、みんな内緒で、こんなエッチなこと、誰でもしてるのよ……」
「わあ……あ、愛しあった……？」
「だから、今日は特別」

……ピチャ。
「ひゃああ」
ついに綾子はしごくだけでなく、飛び出させた舌で猛る肉棹をあやし始めた。
卑猥な軟体動物のようにも見えるローズピンクの長い舌が、疼く牡幹をねろねろと、いやらしい動きで這い回る。
（な、何これ!?）
生まれて初めて体験する生々しい激感に、徹はゾクリと鳥肌を、腰から背筋に駆け上がらせた。
……ピチャ、ねろねろ、ねろん。
「わあ、そんな――」
（き、気持ちいい！　え、ええ……？）
だが綾子の舌責めは、棹部分への往復だけでは終わらなかった。
しつこく何度も棹を舐め、表も裏もドロドロにぬめらせ抜いたかと思う頃、今度は突然舌先で、れろんと亀頭を抉りこむ。
「うわあああ」
それは、思いもよらない電撃だった。火を噴くような快美感に驚愕した徹は不様な

声をあげ、椅子の上で尻を浮かせる。
「感じるでしょ、徹ちゃん。ンフフ、みんなこれが、忘れられなくなるの。ん……」
……れろん、れろん。ちゅぱ、れろん。
「うわあ、うわあ。何これ、ああ、綾子さん。わああ……」
(嘘だろう。き、亀頭……メチャメチャ気持ちいい!)
二度、三度と繰り返される綾子の亀頭舐めに、徹はもうじっとなどしていられない。椅子の上で尻を揺すり、女のように身悶えては情けない声を出した。
しかし、鈴口から閃く強い快感は、はっきり言って未知の恍惚。
オナニーなど比較にもならない腰の抜けそうな電流が、舌でれろんと舐めあげられるたび、ペニスから脳へと突き抜ける。
「気持ちいい? 男の人って好きよね、ここ舐められるの。ねえ、ここでしょ?」
色っぽい未亡人は、全部お見通しよというように目を細め、潤んだ瞳をエロチックに煌めかせた。
イカのエラのように出っ張った肉傘の縁を、二枚も三枚も舌があるような舐め方で、円を描くように舐め回されれば、
「ああ、待って。き、気持ちよすぎちゃう。そこ、そんなにされたら精子が……!」

早くも射精感が募りだす。
徹は浮き足立って、訴えるように綾子に言った。
「だめ。まだ我慢するの。男の子でしょ？　男はいつだって痩せ我慢よ……ん……」
……ぴちゃぴちゃ。れろれろ、れろん。ちゅぶ。
「ずおおお……」
綾子はさらに舌をくねらせ、亀頭の出っ張りを三百六十度満遍なく舐め回した。首筋が引きつるのを感じながら、徹は天を仰ぎ、間抜けな声を震わせる。
亀頭の出っ張った部分が最高に敏感で、男にとっては究極の恍惚スポットであることは、もちろん徹にだって分かっていた。
しかしそこをこんな風に舌で責められることが、これほどまでに気持ちのいいことだったなんて、はっきり言って知らずにいた。
「ああ、綾子さん。気持ちいい。気持ちいいよぅ。うわ、うわ。やっぱりだめ。マジで精子出ちゃう！」
「あぁん、だめって言ってるの。お尻の穴、キュッて窄めなさい。ンフフ……まだまだ、本当にいいのはこれからなのよ？」
だが、いつも優しいこの人が、今回ばかりは許してくれない。

めっ、というように子供を叱る母親の顔になった。
続いて一転、柔和な笑みを見せたかと思うと、綾子はいきなり、自分のワンピースをそっとはだける。
「あああ……？」
新鮮なミルク色をしたきめ細やかな美肌が、惜しげもなく晒された。
セクシーな美貌をほんのりと赤らめ、恥ずかしそうにしながらも、綾子はその胸元から、ベージュのブラジャーを露わにする。
「あ、綾子さん!?」
今日はいったい何回、この人に驚かされればいいのだろう。目を白黒させっぱなしの徹は、目の前の熟女の大胆な行為の連続に、苦もなく動転する。
小玉スイカほどもある大きな胸乳が、巨大なブラカップに締めあげられていた。
乳の谷間にくっきりと、濃い影が刻まれている。量感溢れるおっぱいが、できたてのプリンのようにフルフルといやらしく震えた。
「ンフフ、ねえ、徹くん……私の……おっぱい見たい？」
「ええっ!?」
「……見たくないの？」

男の劣情を刺激する、未亡人の挑発はさらに続く。誘うように小首を傾げ、両手を後ろに回した。ブラジャーのホックがはずれる小さな音がする。

白い肩に食いこんでいたストラップが、たちまち力をなくした。二つの大きなカップの中で、たわわな膨らみがズシリと重さを増し、両のカップを押し下げる。

「ぐおお、綾子、さん……」

はっきり言って、もうこの時点だけでも、下手をすれば鼻血噴き散りものの扇情的なシチュエーション。

十九年間、さして幸せなこともなく平々凡々と過ごしてきた自分の身に、まさかこんな夢のようなひとときが、待っていてくれただなんて。

「ねえ、見たくない？」

両手をクロスさせ、今にも乳から剥がれそうな二つのカップを支えあげるような格好になっていた。

「み、見たい！　見たい見たい！」

徹はたまらず駄々っ子のように答えた。しかも間抜けにも、身体を揺さぶって訴えさえしている。

「フフ、可愛い……」

そんな青年の、欲望丸出しの反応に、母性本能を刺激されたらしかった。三十路の熟女はくすっと笑い、子供でも見るような顔つきで徹を見あげる。
「いいわ、見せてあげる。ちょっと、汗ばんじゃってるけど……」
照れ臭そうに言うと、綾子はモジモジと身をくねらせた。
大きな尻を艶めかしく振り、クロスさせた白い腕をブラカップごと、ゆっくりと胸から離していく。
（うおっ！　うおおおお！）

3

……たゆん。たゆん、たゆん。
思いきり吸いこんだ息を、吐き出すこともできなかった。
徹は完全にその場に固まる。
露わになった女盛りの豊満な乳の眺めに、ペニスの真芯がキュンと疼いた。
焼かれたようになった心臓が甘酸っぱさいっぱいの鼓動を、太鼓のように響かせだす。膨らみすぎた餅さながらに盛りあがる重たげな乳房は、得も言われぬ丸みを見せ

つけては、たぷたぷと艶めかしく肉を震わせた。
服越しにしていた目測は、決して間違いではなかった。
九十五センチ、いや、ひょっとすると百センチ近くはあるかも知れない見事な爆乳が、何一つ遮るもののない状態で、眼前いっぱいに晒されている。
やはりこれは、肉で実らせた小玉スイカ、いや、それとも大きな双子のグレープフルーツか。
鎖骨からなだらかなスロープを描いて、量感溢れる裾野が続いていた。
それがスキーのジャンプ台のような曲線を描いて急激に盛りあがったかと思うと、その先にはピンク色をした乳輪と、ぴょこりと突き出す乳首の眺めが待っている。
そして一転、綾子の下乳は白いゴムボールの下半分のような丸みを強調し、胸の下へとおっぱいのラインを潜りこませていた。
「うおお、綾子さん、すごい……」
「ンフフ、そんなにいっぱい見ちゃって。ねえ、ゾクゾクする？」
「う、うん……」
「いいわ、もっとゾクゾクさせてあげる……」
鼓膜を舐め溶かすかと思うような、甘い声だった。

綾子は自ら、二つの乳房をせり上げるように寄せる。
大きく作りすぎてしまった柔らかなゼリーのように、たわわな乳肉がたちまちひしゃげ、その重さをアピールした。
綾子は膝を進める。位置をずらして、体勢を整えた。
たっぷりすぎる乳塊で、天を向く徹の怒張を挟み打ちすると――、
「うおおお……!?」
ふにっと肉の形が崩れ、左右からたわわなおっぱいが、ムギュムギュと擦りつけられる。
柔らかで豊満で、驚くほど温かなその感触に、徹はビンと全身を固くした。
「フフ、見たことあるでしょ、こういうの？　ほら、どんな感じ……？」
「うわあ……」
綾子は言うと、強い締めつけで猛る怒張を挟みこみながら、上へ下へと乳肉を揺さぶりだした。
それだけでは飽きたらず、首を伸ばして下を向く。クチュクチュと口を窄め、粘つく唾液を乳の谷間に注ぎこんだ。
……にちゃ。ねちょねちょ。

「おおお、うわあ、うわあ……ああ、すごい……こ、これ……パイズリ？」
ネットでこっそりと観賞するＡＶ動画で、何度目にしたか知れなかった。
そんな憧れの性行為を、こんな見事な巨乳を持つ美しい熟女にこんな風にしてもらえるだなんて、やはりこれは夢ではないだろうか。
「そうよ、パイズリ……んっんっ、んはあぁ……どう、感じる？　んっんっ……」
「うう、か、感じる……ああ、これも気持ちいいよ、綾子さん！」
唾液を味方につけた乳塊は、ヌルヌル感といやらしい温み、弾力感溢れる肉質で、傘と棹を擦過した。
そのたび亀頭からビリビリと、甘酸っぱさいっぱいの電流が弾け、徹は股間を疼かせては、「おう。おおう」とたまらず呻く。
徹の巨根は、完全に乳の間に埋没していた。
綾子が豊乳を下へとずらすたび、暗紫色の亀頭だけが、ぴょこり、ぴょこりとリズミカルに飛び出してくる。
怒濤の乳愛撫の洗礼を受けた鈴口は、早くもヌルヌルと綾子の涎にまみれ、いやらしいぬめりを帯びていた。
「ンフフ、気持ちいいでしょ？　可愛い顔して、喘いじゃって。むはぁぁ……」

「わわっ⁉」
……ぴちゃぴちゃ。れぢゅぷ。ねろん。
「うおおお、あ、綾子さん……ううっ、たまんない……！」
綾子の責めはパイズリから、ごく自然にパイズリフェラへとエスカレートした。
しこしこと二つのおっぱいで上へ下へと男根をしごきながら、飛び出す亀頭に舌の雨を降らせだす。
右から、左から、もう一度右から。続いて円を描く動きでグルグルと、出っ張った部分をしつこく何度も舐め回す。
「はぁはぁはぁ……むふう、むふう、アン、徹ちゃん。んっんっ」
「くうう、気持ちいい。信じられない……世の中に……あっ、あぁ……こんな、気持ちのいいことがあったなんて……」
「そう？　フフ、知らなかったでしょ。世の中の男と女は、みんなこんなことしてたのよ。でもって、こんなこととかも……」
ひょっとしたら、淫らな行為の連続で綾子も次第に興奮が増してきたのか。
どこか落ち着かない様子でプリプリと尻を振り、熟れた女体に荒れ狂いだした官能を、ちょっぴり持てあましたような様子になる。

色っぽい美貌をさらに紅潮させた。色白の美肌から、じっとりと汗を滲ませだす。肉厚の朱唇から熱い吐息を切れ切れに零して奉仕を続けていたかと思うと、未亡人は突然長い首を伸ばし、

「……はむん」

「うおおお！　うわっ、うわあ……」

とうとうペニスを頭から、パクリと口中に咥えこんだ。

……ぢゅぽぢゅぽ。ぢゅぽぢゅぽぢゅぽ！

「うわ、うわうわ、うわ！　ああ、綾子さん、待って。わああ！」

（き、気持ちいい！　やばい、やばい！　あああ……）

「むふう、むふう。いっぱい、気持ちよくなって、徹ちゃん。んっんっ……」

驚いて怯む徹の反応も、多分想定内だったのだろう。

綾子はキュッと朱唇を窄めた。

ヌメヌメした口腔粘膜を窮屈極まりない筒のようにしながら、前へ後ろへ、前へ後ろへと、リズミカルな前後動で顔を振り立てる。

そうしながら、さらに激しい擦り方とともに二つのおっぱいでしごき立てられれば、徹はたまらずブチュブチュと、綾子の口中にカウパー腺液を漏らしてしまう。

「んんっ⁉　むはぁ、徹ちゃん……」
「ご、ごめんなさい！　あの……先走りが……」
「ンフフ、いいのよ。んっ……」
「たはあ……！」
ペニスの先から我慢汁が溢れたことに、すぐさま綾子も気づいたらしかった。
しこしこと豊乳で棹の部分をしごきつつ、綾子はねっとりと亀頭を舐め、カウパーの粘りを拭い浄めるようなフェラをする。
そんな風に、舌で鈴口を擦られると、仙骨のあたりから麻薬のように、脳へ、四肢へと甘い震えが広がった。
「はう、ああ、綾子さん。だめ、これやっぱり俺……もう我慢できない！」
どんなに尻を窄め、奥歯をきつく噛みしめても、もはや限界のようだった。
抑えつけようとすればするほど、逆に射精感が膨張する。
陰嚢の中のザーメンが、出口を求めてペニスを、全身を、甘酸っぱさいっぱいに雑巾絞りする。
「むふう、んむふう、もう出ちゃう？　いいのよ、いっぱい出しなさい……！」
徹の白旗宣言を聞いた美熟女は、奉仕のフィニッシュに入った。

さらに左右から乳を押しつけて肉幹をしごき、啄木鳥顔負けの首振りで、爆発寸前の亀頭に口腔粘膜を擦りつける。

……ぢゅぽぢゅぽ。んぢゅぶぴぶぴぴ！　ぢゅぽぢゅぽぢゅぽっ！

「うわあ、き……気持ちいい！　出るよ、綾子さん！　ああ、精子出ちゃう！」

「いいわ、出して！　好きなだけ出して。んっ……」

「ああ、もうだめ。イクイクイクッ！　うわあああああ！」

――どぴゅどぴゅ！　びゅるぶぴぶぴぴ！　どぴゅどぴゅどぴゅ！

恍惚の雷に脳天から貫かれた。

天にも昇る爽快なカタルシスとともに、しばし徹は、重力からすら解放されたような飛翔感を覚える。

「あ、あああ……最高、だぁ……」

ビクビクと、射精をしながら痙攣した。

これまでの短い人生の間にもおびただしい数の射精をして来たが、こんな鳥肌ものフィニッシュは初めての体験だ。

「んむう、んむぷぅ……あぁん、徹、ちゃん……」

そんな徹の精液を、動きを止めた綾子が、色っぽく呻きながら受け止める。

柔らかな朱唇はキュッと窄まったままだった。エロチックな鼻息を音を立てて零しながら、形のいい鼻翼をヒクヒクと開閉させる。

「ご、ごめんなさい、綾子さん。いっぱい、精子出ちゃう。あああ……」

申し訳ないと思いはするものの、始まってしまった射精衝動はどうにもできない。陰茎を雄々しく脈打たせ、本人ですら呆れるほどの白濁を、繰り返し熟女の喉奥深くにぶちまけていく。

「んむふぅ……ああん、すごい……んあぁ、若い子って……すごいのね。ん……」

綾子はぬるぬるした口腔を徹のために捧げながら、感激したような呻き声を零した。額からじわりとさらなる汗が滲み、つつっと鼻の脇へ流れる。

「ああぁ、綾子さん。すごく、出しちゃった……」

陰茎の激しい痙攣が、ようやく終息した。なおも熟女の口の中へ白濁の残滓を垂れ流しながら、徹はいたたまれなさにかられて謝罪する。

「ンフフ、ほんとね。いいのよ、嬉しい……」

……ちゅぽん。

淫靡な音を立て、綾子は口からペニスを放した。

徹の極太は、ありったけ精を吐き尽くしたというのに、なおもギンギンに反り返っ

たままだ。
「んっ……」
……こくっ、こくっ。
「――えっ。綾子さん。そんなことまで……」
上を向かないと、口から精子が溢れてしまうのであった。
色っぽい熟女は頬を染め、切れ長の瞳を潤ませたまま天を仰ぐ。喉を鳴らして精液を嚥下し、小指で顎から、白濁を拭った。
まさか、精飲までしてくれるなんて思いもしなかった。
何しろ未亡人が飲んでいるそれは、常日頃徹がティッシュの中にぶちまけ、後の処理にも難儀する面倒な代物だ。
(なんか、嬉しい……)
自分のザーメンなんかを、恥じらいながらも飲んでくれているというその現実が、無性に徹の多幸感を煽った。
そんな彼の思いを代弁するかのように、反り返ったままの怒張が、ヒクン、ヒクンと脈動した。

4

「フフ、まだ満足できない？　そうよね。徹ちゃんぐらいの歳の男の子って、一日に五回も六回も射精できるんでしょ？」

精液を飲み終えた綾子は、ひくつく徹の一物に目ざとく視線を向け、官能的な笑みで青年を見上げる。

「そ、そんなには……」

そうは言いつつ、あながちはずれてもいなかった。

身体が火照って眠れずに、ネットの動画に救いを求めるような夜には、正直、それぐらい、続けざまに果てることもある。

恋人もいない十代の男には、女の人には決して分からない、過酷ともいえるつらさがあるのだ。

「いいわ、約束したものね。いろんなこと、教えてあげるって……」

綾子は言うと、スカートを翻して立ち上がった。続けて上体を屈めると、両手をスカートの中に入れる。

（えっ……ええっ!?）

それは、あれよあれよという間のことだった。
美しい未亡人はワンピースの中から、これまた漆黒のエロチックなパンティをつるりと脱いでその手に丸める。
「あ、綾子さん!?」
「恥ずかしいけど、ちょっと濡れちゃったかも……」
徹の目から見えないあたりに、そっとパンティを置いた。綾子は、さらにほんのりと美貌を赤らめ、艶めかしく苦笑する。
徹の知らない、積極果敢な熟女がそこにいた。
綾子は照れ臭そうな笑みを浮かべながらも、へたりこんだままの徹と向きあう格好で小さな椅子にまたがろうとする。
(これは……も、もしかして……対面座位!? あ……)
「徹ちゃん……私なんかが……初めての女の人じゃいや?」
大胆な大股開きになって徹の上にまたがった綾子は、最後の意思を確認するかのように、彼に聞いた。
生温かな吐息は甘い香りがし、それにも淫心を逆撫でされる。
「そ、そんな……」

小首を傾げて艶めかしく問われ、徹はまたも鳥肌を立てた。
こんな状況でこの質問を投げかけられ、「はい、正直迷惑です」などと言える十九歳がいたら、お目にかかりたいものである。
「そう？　ンフフ、それじゃ私が徹ちゃんを……大人の世界に連れていってあげる」
そう言うと、綾子は大股開きのはしたない格好のまま、位置を整えるようにさらに徹へと近づいた。
ワンピースのスカートは、太腿の半分ほどまでたくし上げられている。脂の乗った白い腿が、フルフルと肉を震わせる眺めが惜しげもなく晒された。
「あ、あの、綾子さ……あ――」
綾子は再び、ペニスを手に取った。
自らさらに腰の位置をずらすと、反り返る極太の先端を、彼の知らない女の人の究極の部分に密着させようとする。
……にちゃ。
「わわっ!?」
その途端、またもフェラチオをされたかのような激感が弾けた。
（な、何だ、今の）

「ンフフ、これぐらいで驚かないの。これからもっと……すごいはずよ。あ……」
綾子はそっと腰を落とした。
「――わっ！　わわ、わわわっ⁉」
……にゅるん。
「あはああぁぁ……」
「えっ……ええぇっ⁉」
その途端、突然ペニスがヌルヌルと温かな、異世界そのもののぬめりに飛びこむ。
それは、信じられない感覚だった。
綾子の口もあり得ないほどの快さだったが、今怒張が埋まったこのいやらしい肉洞は、はっきり言って口腔粘膜の比ではない。
「あ、綾子さん。うわあ、わああ……」
「はぁぁぁん、徹ちゃん……」
……ズブッ。ズブズブ、ズブッ。
綾子はさらに腰を落とし、たっぷりとぬかるんだ腹の底に、徹の猛りを沈めていく。
白い指で、徹の肩を掴んでいた。
指から伝わる生々しい熱もいつの間にかさらに温度をあげ、その上じっとりと淫靡

な湿りを帯びている。
（ああ、すごい！　これが、女の人の……あああ……）
ペニスを締めつける窮屈な肉感に、徹はたまらず呆けたようになった。ヌルヌルした温かな肉が、全方向から屹立を締めつける。
一度射精をしておいてよかったと心から思った。そうでなければ、すでに呆気なく、徹は精子を暴発させていたはずだ。
「あぁぁ、入っちゃったわね、徹ちゃん……」
徹の肉棹は、完全に綾子の蜜壺に埋まった。熟女の汗ばんだ太腿が自分の腿にピタリと密着したことで、徹はそうと知る。
「ああ、あ、綾子さん……これが……」
感激のあまり、まともに声も出なかった。
そんな徹の歓喜と戸惑いを知ってか知らずか、綾子は「ンフフ」と微笑んだかと思うと、突然媚肉をヒクンと艶めかしく絞りこむ。
「うわあああ」
（何これ。気持ちいい！）
「そう、これが……フフ、女の人の……オマ〇コよ」

「オマ――⁉」
徹は目を見開く。綾子がこんなそのものズバリの言葉を囁いてくるなんて。
やはり自分が知っていたのは、酸いも甘いも噛み分けた大人の女性のこの人の、ほんの一部に過ぎなかったのだと、改めて徹は思った。
「ほら、奥歯噛みしめて」
母性本能に充ち満ちた甘い声音で囁かれた。徹は思わず眉を顰める。
「え？」
「動くわよ。いい？」
どうなっても知らないわよとでも言いたげな、そのくせ、戸惑う徹を丸ごと包みこもうとでもするようなトーンだった。
綾子はがに股に開いた足を踏んばって、上へ下へと火照った女体を揺さぶりだす。
……にちゃ、ぐちょ。
「わああ！　わあああ⁉」
「ほら、奥歯噛みしめて……アン……ンフフ……あ、あぁぁ……」
すぐ目の前に――いや、それどころか身体を一つに繋げた密着状態で綾子がいるというのに、溢れだす叫び声を徹はどうにもできない。

（き、気持ちいい！　マジ⁉　マジ、マジ⁉　わあああ！）
窮屈に窄まった肉の筒が、卑猥なピストンとともに怒張をしごいた。
ぬめる牝襞の微細な凹凸が棹と亀頭を擦過するたび、目の眩むような恍惚の火花が散る。徹はたまらずカウパーを、早くもドロリと漏らしてしまう。
「あ、綾子さん。わあ、わあ。だめ。何これ……せ、精子出ちゃう！」
「だめよ、あ、あ、ンフフ……こんなところで精子なんか出したら、女の人に笑われちゃうわよ？　我慢して……あっあっ、ああん、徹ちゃん……」
「だって……だって⁉」
加熱されたバターのようになってしまいそうな快美感に愕然としながら、徹は声を上ずらせる。
亀頭に擦りつけられる牝肉は、まるで無数の舌のよう。
あちらからこちらから、競いあうようにカリ首に吸いつき、ちゅうちゅうと音さえ立てんばかりの激しさで、疼く亀頭を舐めしゃぶる。
それだけでも、すぐにも果ててしまいそうだった。しかもその上――、
「あ、あ、あん、いやん、徹、ちゃん……あああぁ……」
「ああ、やめて。そんなエッチな声出されたら俺……うわ、うわああ……」

目の前でよがる未亡人の声と姿にも、痺れるほどの情欲をかき立てられる。綾子は熱でも出たように熟れた美貌をぼうっとさせ、潤んだ瞳を虚空に揺らめかせる。

「だって、あ、あぁぁ、声出ちゃうの……あはあぁ、こんなことしたら女は誰だって、エッチな声出ちゃう……知らなかった？　あああ……」

「し、知ってたけど⁉　でも……」

そう。「でも」なのである。

AVなどで淫らによがる会ったこともない女優たちと、日頃からよく知る綺麗で身近な女の人がこんな風によがるのでは、はっきり言って刺激が違いすぎた。

その上綾子の蜜壺は、肉スリコギをしごけばしごくほどさらに艶めかしく蕩けきり、愉悦の汁を漏らしながら激しくペニスを絞りこんでくる。

そして、かてて加えて言うならば――、

（ああ、綾子さんのおっぱい！）

眼前でたゆんたゆんと弾んでいるのは、Hカップはあろうかという小玉スイカ顔負けの巨乳だった。

しかも乳首は痼りきり、痛いのではないかと思うほどまん丸に張りつめている。

徹はこみ上げる射精感におののきながら、本能に導かれるように、両手で乳をわっ

しと掴む。
（うおおおお⁉）
「ひはあああぁぁ、徹ちゃん……」
……グニグニ。グニグニ、グニ。
「わあ、柔らかい！　柔らかい、柔らかい！　興奮する！」
初めて鷲掴みにした女の人のおっぱいは、今まで手にしたどんなものより、さらに柔らかだった。
世の中に、こんな感触の柔和なものを、他に徹は一つも知らない。
「んはあぁ、いやん、徹ちゃん、だめ、だめ。あああぁ……」
指を伸ばして触ってみると、乳首はグミのように硬く、何度乳輪に倒しても、ぴょこり、ぴょこりと元の姿に戻って勃つ。
（知らなかった……これが……女の人のおっぱい！）
頭の真芯が、さらに痺れた。いったいこれはどういうことだ。乳を揉めば揉むほどさらにペニスがギンギンに猛り、芯の部分が熱くなる。
「あ、あ、あああ。徹ちゃん、ああ、どうしよう……私も……感じちゃうわ！」
「だ、だめ！　そんなこと、そんな声で言わないで！　だめだめ……ああ、やばい、

やばい！　精子出る！　出ちゃう、出ちゃう！　我慢できないよぅ！」
どんなに尻の穴を窄めても、もはや限界だった。
生まれて初めて体験する膣と乳房の破壊力は、奥歯を噛みしめたぐらいでどうにかなるほど柔ではなかった。
「もうだめ？　あ、あ、ああ……我慢できない？　ああん、徹ちゃん、あああ……」
もしかしたら未亡人も、一緒に達しようとしているのだったか。
鼓膜を舐め溶かす色っぽい声を切迫させた。
熱い吐息を徹の顔に撒き散らしながらその身体にしがみつき、ついにはカクカクといやらしく腰をしゃくりだす。
「わあ、それだめ。気持ちよすぎちゃう！　ねえ、精子出ちゃう！　もう出ちゃう！」
汗ばむ熟女の熱い肌を全身に感じながら、徹は引きつった声をあげた。乳首の突起が胸板に突き刺さり、熾火のような熱さを伝える。
（あ、綾子さんが……自分からこんなにいやらしく腰をしゃくって。たまらない！）
「いいのよ、あっあっ、イキなさい。ああ、私も……あああ……」
徹をかき抱いた綾子は青年の耳に朱唇を寄せ、ねろねろと耳を舐めながら囁いた。
「で、でも……でも⁉　そんなことしたら――」

「いいのよ、中に出させてあげる。今日だけ特別よ。あ、あ、ああ。あああ……」
「嘘……わあ、わああ……」
夢のような言葉を甘い声で囁かれ、徹は完全に腑抜けになった。肉壺で執拗にしごかれる怒張が猛烈に加熱し、疼く真芯を精子の奔流が轟々とせり上がる。
「ああ、気持ちいい！　もっとしていたいよぅ。この時間たまらない。でも出ちゃう。いいんだよね？　綾子さん、出ちゃうよ⁉」
全身が痺れ、キーンと耳鳴りがした。目の前で白い光が瞬きだし、聴覚はおろか、視覚までもが怪しくなる。
「あ、あ、あああ。徹ちゃん。出して。ああ、私もイク！　イクううぅ！」
「ああ、出る！　出る出る出る出る！　うわあああああ！」
「ひいいいぃ！　あっあああああぁ‼」
――びゅるびゅるびゅる！　どぴゅどぴゅどぴゅぴゅ‼
ロケット花火のように、天空高く打ち上げられた心地だった。何もかもから解放され、いまだかつて体験したこともない遥かな高みへと、徹は到達する。
「あ……あああ……綾子、さん……」
さっき一度射精したというのに、何だこの雄々しさはと、自分で呆れた。

徹のペニスは、もう一か月も禁欲生活を続けた末の射精のように、ドクドクと何度も脈打っては、濃厚な子種を未亡人の膣奥深くにぶちまけていく。
夢のようだった。
知ってはいけない快感を、知ってしまったと怯えすらした。
「はうう、と、徹、ちゃん……素敵よ……やれば、できるじゃない……」
綾子は徹にしがみついたまま、ビクビクと肢体を痙攣させる。熟女の身体は、ねっとりとした汗にまみれていた。
「綾子さん……」
「これが……女の人……これが……セックスよ……あはあぁ……」
「うう……」
綾子の痙攣は、なかなかやまなかった。
中出し射精の多幸感に打ち震えながら、徹はそんな熟女のぬめる蜜洞に、さらに何度もとぷとぷと、ありったけの白濁を注ぎこんだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索